

南宋文人の文学活動と出版：王十朋と陸游をめぐって

甲斐, 雄一

<https://hdl.handle.net/2324/1440978>

出版情報：九州大学, 2013, 博士（文学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（3）

論文題目 南宋文人の文学活動と出版——王十朋と陸游をめぐる——

氏名 甲斐 雄一

論文内容の要旨

南宋文人の文学活動と出版——王十朋と陸游をめぐる——

中国出版文化史において、版本というメディアが普及した宋代（960-1279）は、それ以前の中世から近世への移行を準備した時代として位置づけられる。そしてその変革は、文学創作者に作品の編集・流通・保存などの過程について意識させ、彼らの文学活動を促進させた。このような文学活動と版本や出版業との関連について、宋代を通覧した研究成果は既に一定の蓄積を有する。しかし、女真族の金朝と国土を二分した南宋期（1127-1279）に特化した研究は未だ不十分である。

本論文は、王十朋（1112-71）と陸游（1125-1210）という二人の文人を対象とし、南宋文人の作品及び詩文集の流過程に着目し、それらがどのように編集・出版され、さらにはどのように読まれ評価されたのかを検討しながら、南宋文人の文学活動に出版印刷がもたらした変革について究明するものである。

序論では、南宋出版文化が首都杭州を離れ、各地方で発展したことを踏まえ、文学活動が展開された地方を重視し、出版活動に関わった階層の重層性について概説した。また、研究対象とする二人の文人について、科挙の首席合格者である状元の王十朋が、南宋の編集者や出版者に名声を利用された文人であること、それに対し陸游が自ら詩集を編集・出版した文人であることを指摘し、両者を対照的な文人として位置づけた。

上篇では、王十朋という文人をめぐる、官僚文人自身の出版の活用と、中間層文人による文学作品の編集・出版とを対置することで、南宋期における文学作品流通の諸相について解明した。

第一章では、南宋期に新興した中間層文人の編集出版活動に関して、王十朋の作品『会稽三賦』に注を附した史鏞という人物について考察した。その序文や注釈の検討を通して、彼が同時代の史料を活用し、かつ詩歌の作成能力を備えながらも、南宋王朝への帰属意識を持たない中間層文人であることを確認し、彼らが南宋期の文学作品流通に大きく寄与していたことを指摘した。王十朋『会稽三賦』とその注釈に関する本格的な研究は本論文が最初のものである。

第二章では、書名のみが伝存する王十朋を中心とした唱和詩集『楚東唱酬集』について復元を試みた。その唱和活動の時期や参加者を特定すると共に、この唱和活動が官僚としての政治主張という公的性格を強く有し、その喧伝として刊刻という手段が用いられたこと、また版本という媒体に託することによって、それを讀んだ張孝祥という新たな唱和者の反応までもが一連の文学活動とし

て展開されたことを指摘した。

第三章では、「王状元」として王十朋を編集者に仮託する蘇軾詩の注釈書『王状元集百家注東坡先生詩』に挙名される「百家」の注釈者のうち、王十朋との関係を有する注釈者について調査し、第一に科擧の首席合格者「状元」そのものに対する評価、第二に主戦派の一員としての王十朋への評価、第三に泉州知事として赴任した王十朋に対する名地方官という三層構造の評価が「王状元」という商標の背景にあったことを明らかにし、中間層文人が官僚文人の名声を利用していた実態を明らかにした。

続く下篇では、陸游の詩集『劍南詩稿』の本人による出版に関して、全集のタイトルに何故「劍南」という地名（四川を指す）が踏襲されたのかという問題から出発し、『劍南詩稿』というタイトルをめぐる当時の陸游評価とそれが形成された背景について検討した。

第四章では、陸游の四川への慕情について、陸游と四川人士との交流によって生じた強い共感はその根源にあったことを明らかにした。また陸游と范成大の四川における交流は、当時閉鎖的であった四川の在地文人と江南文人との文学的交流でもあったことを指摘した。

第五章と第六章では、陸游の巖州知事在任時における『劍南詩稿』の出版をめぐる、詩人陸游に対して当時「四川を踏破した詩人」という評価が読者から与えられていたことを明らかにした。そして、その評価形成の背景には、四川への地方赴任という宦遊が、もはや左遷というマイナスの評価ではなく、詩人たる為に必要な実地体験であるという概念の変革があったことを指摘した。

以上を総括し、本論文は二つの結論を提示した。第一に、具体的に論じられることの乏しかった南宋期の文学活動と出版との関係について、中間層文人という概念を設定し、当該期の編集出版活動が、北宋以前の官僚文人層のみならず幅広い周縁層によって展開されたことを究明した。そして、これを続く近世における民間文人につながる文学創作主体が拡散していく過渡期的現象として位置づけた。第二に、近世まで続く江南地方を頂点とする文化的偏差の原型が、杭州臨安を仮の首都としたこの南宋期に形成し強化されたことを指摘した。これを要するに、本論文は、従来中世（唐以前）と比較されてきた宋代文学について南宋期に細分化して検討することで、以降に続く近世との連続性という新たな知見を提起するものである。